

一橋時代の野崎歓

三浦 哲哉

1

野崎歓先生は、一九九〇年から約十年間、一橋大学で教鞭を取られていた。この時期の野崎先生の思い出を、学生だった私たちの視点から書き記したい。

私が入学したのは一九九五年。社会学部だった。野崎ゼミに入るのに先立ち、映画に傾倒するきっかけがあった。「映創会（えいそうかい）」という名前の映画サークルに入ったことである。春に新入生歓迎イベントとして、8mm 映画を上映するというので見に行った。モノクロの西部劇だった。いかにも軽妙なコスチューム・プレイかと思って見始めたのだが、だんだんと、クオリティが異様に高いことに気づき、最後はすっかり感動した。これはすごいと思って入会を決めた。

野崎先生の存在を知ったのは、「映創会」の部室で、先輩たちの会話を通してだった。「野崎さん」と、誰もがさん付けて呼んでいた。「あの映画は野崎さんが授業でやたら褒めていたな……」「そういえば野崎さんのゼミでこの映画が……」という具合。先輩たちは、映画観賞、8mm 映画制作、それに先立つ資金作りのためのアルバイトで忙しいため、大学の授業にはほとんど出ていなかったが、「野崎さん」の授業とゼミだけは別で、サークルのほとんど絶対的な必修科目と決まっているらしかった。

上述した西部劇を監督したのは、小林さんという先輩で、やはり野崎ゼミで映画の薫陶を受けたのだという。太い芯の通った、クラシカルな作風は、その影響なのかもしれないと思われた。すでに八年生で、週に何回かは部室に寝泊まりしており、いかにも只者ではない風彩の方である。小林さんが「野崎さん」というとき、その響きには親しみと信頼感があった。部室に通ううちに私も自然と野崎ゼミを志望するようになっていた。

まず、二年生向けのゼミを野崎先生も担当されていたので、そこに入ろうと思った。選抜のための材料として、映画についての文章の提出が課せられた。ジョン・フォードで書いた。提出しに学務課へ行く途中、ちょうど向こうから野崎先生が歩いてこられたので、初めてご挨拶し、そのまま直接お渡

した。先生は、バッグにそそくさと課題文をしまうと、じゃあ、と足早に立ち去られた。

その翌週だっただろうか、野崎先生から直接お電話があった。なんでも、掲示板に張り出されることになっているゼミ選考結果のリストに私の名前はないけれど、心配はいらない。提出課題をかばんに入れた後、失念していたのだが、いまちょうど読み、ゼミメンバーに入ってもらうことにしたところだ、とおっしゃった。こうして野崎ゼミの一員になった。後から知ったのだが、五〇人以上が応募して十名ほどが選抜されるという狭き門だったそうだ。

ゼミの雰囲気は独特だった。どのような雰囲気だったか、背景も含めて説明したい。

一橋大学は、全般に自由でゆるやかな気風で知られるのだが（「西のぬるま湯が京大、東のぬるま湯が一橋」という言い方を学生たちは好んでした）、商学部が看板学部の、いわばビジネスエリート養成所である。文学部は存在せず、野崎先生も所属は法学部。だから映画や文学に傾倒している者は、構内でどこか浮いた、というか、本流から離れた存在と見なされた。そういう者は、たいがい就職、というか、まともな経済活動に後ろ向きだった。映創会の先輩がその典型で、何回も留年を重ね、ひたすら映画制作に没頭していた。私もまた、規定のレールに乗って就職活動をしていいのだろうか、と不安まじりに考えるようになっていた。

野崎ゼミは、そうした脱線組、ないし脱線予備軍のアジュール、あるいはサンクチュアリ（野鳥のサンクチュアリ、というような意味だ）だったのだと思う。私たちは互いの顔を見るなり、ここが同志たちの集結する場所だということを直感した。映創会から集団で入った仲間はもちろんのこと、そこで初めて会う連中にも、似た匂いがあった。多かれ少なかれ全員がほかならぬ映画にはまっているのだから、話題に困ることは一切なかった。

ゼミ選抜の前後のことをこうしていまだに鮮明に覚えているのは、入れて非常にうれしかったからなのだが、それだけではなく、自分が人生のどんな道を歩むことになるか、その一つの岐路の前に立っているという、期待と不安と緊張の入り混じった気持ちがあったからだろう。もし野崎先生があのととき、かばんに入れた私の提出課題を読むことなく忘れたままだったら、まったく別の人生を歩んでいたかもしれない。

ゼミの初回に何をしたかも、いまだにはっきりと覚えている。野崎先生は、新メンバーの一人ひとりに、自分が愛好するものについておおいに語ってください、とリクエストされた。一番熱い奴が優勝、というような調子である。

あえて映画以外の何かで、というお題だったと記憶する。小説、音楽、漫画、洋服、等々について、私たちは堰を切るように語ったのだった。物怖じする者は一人もいなかった。愛好するものについてただ率直に語る。大学の教室でそういうことをするのが新鮮で、自由を満喫する心地がしたからだろう。

野崎先生の下のお名前が「歓」なのはあまりにできすぎていて、筆名ではないか、などと囁きあったこともある気がする。映画や文学の歓びについて語るべし。歓びについて語らないのは馬鹿げている。これが何と言っても、私たちが野崎ゼミで受け取ったメッセージの核心だった。野崎先生が翻訳された『ジャン・ルノワールエッセイ集成』（青土社）の帯に、「脳みそくたばれ、官能ばんざい！」というルノワール自身の言葉が書き記されるのは一九九九年のことだ。ちょうど私がゼミに在籍していた時期と重なる。笑いの絶えないゼミだった。ゼミの中で野崎先生が否定的な発言をされた記憶は、ほとんどない。学生の着想を何でもおもしろがる。おもしろいねえ、すごいねえ、よく考えついたねえ、と褒めては、楽しそうに笑っておられた。

ただ、ゼミの最後の十分ほどになるとスイッチが切り替わり、作品についてのご自身の所見をものすごい集中力で一気に呵成に述べられる。ゼミでは、フリッツ・ラングやジョン・カサヴェテスといった監督の映画が毎回一つずつ取り上げられるのだが、各回の最後に野崎先生は作品における一番肝心のポイントをできるだけ直截に言い当てるべく、研ぎ澄まされた言葉を驚くべき流暢さで紡ぎ出された。私は毎回、この最後の十分が楽しみでしかたがなかった。いつか、こういうことを自分でも話せるようになりたいと思うようになった。

大学院のゼミの野崎先生は、すこし雰囲気違っていただけで、後日、知るようになる（私は結局、一度留年したこともあり、卒業する年は院ゼミにも出席させていただいた）。院生たちへの指導は優しいだけでなく、厳しい、と感じられることがしばしばあった。学生がいかにもおおげさな理論を振りかざして作品を語ろうとするとき。いかにも付け焼き刃の硬直した言葉で研究発表がなされるとき、先生は断固とした調子で問題点を指摘されたものだ。

かくいう私自身も、大学院に入ってから、いまにして思えばいかにも頭でっかちというほかない研究計画書を見ていただいたことがあり、研究態度を根本から考え直すように、とお叱りの言葉を頂戴したことがある。それがいかに貴重なことだったか、いまは身にしみて理解できる。理論を学ぶことが重要なのは言うまでもないが、それが目的になって、分析対象である作品それ自体の魅力を蔑ろにするようでは本末転倒も甚だしい。何より大事なものは

作品をまっすぐに愛好し、その魅力を可能なかぎり余すことなく言葉へ翻訳しようと試みる態度である。この原点を揺るがせにするのは先生にとって絶対にありえないことだった。

野崎先生が一橋で担当されていた、映画表現史の講義についても触れたい。全学部生が受講することのできる学内屈指の人気講義で、大教室に詰めかけた学生数は、学期の終わりまで減らず、最終回には大きな拍手が自然に湧き上がった。アカデミックな映画学ないし映画論がまだ大学の中で新鮮に感じられる時期だった。

リュミエール兄弟から始まり現代映画に至るまでを順番に辿ってゆくのだが、抜粋上映のセレクトがつねに抜群におもしろく、驚きと発見があった。つまらないものは絶対にかけないという方針を徹底しておられたのだろう。たとえばあるとき、現代香港のアクション映画の一場面が上映された。カーテンを閉めた大教室に、延々と、約五分間ほどだったのだろうか、激しくも華麗に振り付けられた銃撃戦が大音響とともに展開する。上映後、あつけにとられる私たちに、野崎先生は質問された。「この場面には、はっきりした形式的な主題があります。何かわかりましたか?」。えっ、主題? 挙手して答えられる者は誰もおらず、私も残念なことに何も思いつかない。するとおもむろに野崎先生は説明を始める。「二つの拳銃を両手に構えた男が、二人並んでやってきて、背中合わせになり、互いの死角を守りながら、敵グループを制圧してゆく。この場面には視覚的かつ物語論的なレベルで、いたるところに双数性の主題を見出すことができます。監督の名はジョン・ウー……」。いわゆる主題論批評の実演だった。作品の魅惑をかくも鮮やかに切り取り、言語化しうることには驚かされた。映画評論と研究において誰が、どう重要かも示唆された。アンドレ・バザン、フランソワ・トリュフォー、セルジュ・ダネー、山田宏一、蓮實重彦……。私たちは授業後、それら著者の本を何冊もかばんに入れては、大学のあった国立駅から片道約一時間をかけて、フランス映画の特集上映をやっている渋谷の映画館だとか、クラシック映画をまとめて見ることができるアテネ・フランセだとかへ通ったものだった。幸福な日々というほかはない。

2

ここまでは私一人の記憶をもとに書き綴ってきたが、ここからはゼミの先輩方にもご登場願ひ、なるべく幅広い視点から、野崎先生についての回想を

続けたい。この原稿を書くにあたり、何人かの方々にアンケートへの回答をお願いしていたのだ。お聞きしたのは、野崎先生のお人柄、ゼミと授業で印象に残っていることは何か、などである。

先に述べた学生西部劇の監督である「小林さん」こと小林大児さんは、ゼミができた初年度からのメンバーで、八年間の学生生活の後、NHK に就職され、現在はドラマ作りの第一線で活躍する。小林さんは野崎先生のお人柄について次のように回想する。

お若かったですね（笑）。野崎さんの研究室で、数名で飲んでいて、大学の守衛さんがやってきて見渡し、「学生だけで研究室で飲んでいるとはなにごとか」と意見をされたことを覚えています。野崎さんが「あ、いや、僕が教官です。ほんとに」と主張されていました。楽しい思い出です。（飲んでいる学生たちのほとんどが今考えると十代だった訳ですが）。その後の、「大学教員としての野崎さん」がどういうありようだったのか全く分かりませんが、あの頃は確か、四季折々くらいは野崎さんと飲み会をやっていたような気がします。贅沢な時間でした（って、その時は全然ありがたいなんて思わずに勝手に飲んで食べてしゃべっていただけでしたが）。

野崎先生が学生に間違えられるというのは定番のエピソードである。一九九〇年の着任時は三二歳。ゼミが始まったのが翌一九九一年。現在翻訳家として活動する S さん（匿名希望）も同種のエピソードを覚えておられる。

まず印象に残っているのは、見た目が学生と大差なかったこと。本人も図書館で司書から延滞をたしなめられた、などとぼやいておられた。ひょっとしたら、ご自身が学生のような気分だったのか、いちどみんなで国立に住む一ゼミテンの部屋で持ち寄り飲み会をすることになり、いちおう先生にも話は伝えていたが本当に現れたときは、やや意表をつかれた。何を持参されたかはおぼえていない。

ゼミメンバーのアパートで先生と一緒にした宴会のことは私も記憶している（たぶん S さんが言うのと同じだろう）。国立の並木道を —— 忌野清志郎やザ・フィッシュマンズが歌った「大学通り」だ —— 、駅からずっと大学に向かって歩いてゆき、大学を通り過ぎてさらに進むと、やがて南武線の谷保駅にたどり着く。この谷保駅のすぐそばのアパートに集まり、日暮れ時から先生を交えて、車座をつくって歓談したのだった。たしか、持ってこられたのはワインのボトルだった。直接床に置いたグラスの輪染みが残ることをやたらと心配されていた。

飲みの席の追想をもう一つ、現役映画監督 I 君の回答から。

当時の先生はお若かったこともあるでしょうが、学生にも対等な目線でお付き合いして頂き、ゼミの後に飲むことも度々ありました。お酒の席で、一番好きなルノワール作品は何かという話で盛り上がって、確か先生が『捕らえられた伍長』か『ゲームの規則』を挙げていて、ふと気になって「『ピクニック』ではないのですか?」と聞いたら、「バカ! 『ピクニック』は別枠だ!」とおっしゃっていたのが愉快でした。

ルノワールのお話は、授業でも酒席でもたしかによくお聞きした。私が覚えているのは、「『フレンチ・カンカン』を一位に挙げるやつはまだまだ青い!」という断言。

西能淳さんも次のように回想する。

ルノワールの映画は、先生にとっても一つの大きな出会いであったようで、僕たち学生は、敬愛する師が出会いのときめきを包み隠さずに語る様子を、最前線で目の当たりにしながら、映画体験の喜びを感覚的に会得していくような時間を過ごしました。

西能さんは、初期メンバーと私たちの代のちょうど中間（一九九五～一九九六年）に在籍された方で、映画サークルのほうでは、くだんの学生西部劇の主人公のカウボーイ役を演じた。大学卒業後も東京で自主映画制作をししばらく続けたあと、郷里に戻り、現在は理事長として家業の病院経営に携わっておられる。

野崎先生と一緒にいること、お話を聴いていること自体が、当時の僕にとって世界を覗き見る大きな窓だった、感覚でした。[…] 今思い返しても、たとえばキャプテンでの酒場談義というのは、当時のわくわくするような心地のまま、思い返すことができるのであり、今も映画が大好きであります。

「キャプテン」は、当時の国立駅前にあった酒場の名前。港風の内装で、木製の舵が飾られていた。ウィスキーだとかラムのボトルがとても安く、学生だけで行くときは、ボトルを何か一本頼んでは、水と氷で割って、みなで延々と粘った。

野崎ゼミ初期メンバーのひとり、奈賀達人さんも酒場での会話に言及する。

飲み会になると、映画はもちろんのこと、趣味的な話を生徒たちと対等に熱く語り合っていたことが、とても印象残っていますし、どれも楽しいひとときでした。特にロックについて語ると熱かったですね笑。野崎先生ご自身、学生時代はドラムを叩いていたことがあるとか、ラジカセの時代にラジオ番組で放送される楽曲の録音に全集中して臨んでいたこと、マイルス・デイビスと偶然エレベーターに乗り合わせて、「アーユーマイルス？」と尋ねたことなど、とっておきのエピソードを軽妙に語ってくれて、ゼミのメンバーも大いに盛り上がったのをよく覚えています。

ゼミの様子について。Sさんのアンケート回答から。

ゼミではあらかじめ、劇場公開中かビデオ化（VHS）された作品を観て、それについて話すことが多く、先生はときにものまねをした。カサヴェテス『グロリア』で銃を構えるジーナ・ローランズ、『狩人の夜』で指の刺青を見せるロバート・ミッチャムなど。似ていなくとも、こちらの頭には映画の場面が再現された。

西能さんの回答から。

ゼミで扱った作家陣は、ヒッチコックとグリフィス、で。グリフィスの映画を鍛錬のごとく鑑賞し、なんか少し、先生の仰る映画の面白さがわかったような気持ちになっていくことが、嬉しくてしょうがありませんでした。共通の言葉を身に着けていく、というのでしょうか。当時の特集上映では、カサヴェテスやルビッチの素晴らしい映画にも出会いました。

奈賀さんの回答から、授業で印象に残っていることについて。

授業で思い出すことはたくさんありますが、最初の頃だと、先生が黒板に「三隈研次」とまず書き、それから「斬る」と丁寧に書き添えていた場面はくっきりと覚えています。

ちょうど三隈研次の回顧上映をやっていた頃で、「斬る」と書いていたときの先生の後ろ姿は市川雷蔵のごとく静謐にして、ゆるぎない、一本、芯の通った凛とした佇まいでありました。

一九九一年に野崎ゼミができた当初の雰囲気について、同じく奈賀さんはこのように書く。

自分が大学二年生の春に、突然、映画ゼミなるものが始まり、大学で映画が学べると思ってもいなかったのが不意打ちのような感動がありました。勇んで行ってみると、この大学にこんなマニアなヤツらが生息していたのかと目を見張るばかりの個性的で濃い生徒たちが集まっていて、そうした彼ら彼女らとの出会いは本当に大きな財産になったと、むしろ時がたって振り返った今だからこそ強く感じます。

自分は虚勢ばかり張っていたオタクの権化みたいな存在で、最初から生意気な口を利いていましたが、そんな生徒を面白がって受け入れてくれた野崎先生の懐の深さ、そして、素晴らしく居心地が良くて四年間もいついてしまった場所をつくってくれたことに、心より感謝したいです。

初期の「個性的で」「濃い」「マニアなヤツら」については、私もさまざまな伝説を聞いた。最も有名だったのが、漫画家の黒田硫黄さんだ。二〇〇三年には雑誌『ユリイカ』で特集が組まれた。この号には野崎先生も寄稿され、硫黄さんを始めとする「ヤツら」について回想なさっている。雑誌から引用したい。

そうです、黒田硫黄というのはまさに「天狗」でした。二〇歳の男児とはとても思えぬあの風格、あれは天狗としか言いようがない。もっとも当時は天狗ではなく「大王」と名乗っていましたがね。しかも驚いたことに、あのころ、彼とともにぼくの前に現れ出た連中というのが、これまた揃いも揃って生意気なる天狗だらけ。まったくこちらは、正直なところ冷や汗のかきどおしでしたよ。（野崎 敏「昔あるときあるところに……」（『特集 黒田硫黄』所収、『ユリイカ』35巻11号（2003年8月号）、青土社、142頁）

野崎先生自身による映画ゼミ誕生の経緯が以下。

就任した年、教養ゼミのテーマに一九世紀フランス幻想文学研究というのを颯爽と掲げて教室に赴いたところ、学生の姿は皆無。また同時に、二年生のフランス語講読で、わが愛するジェラルド・ド・ネルヴァルの「シルヴィ」をとりあげてみたら反応はこれ以上ないほど鈍く、クラスに陰湿な雰囲気すら漂い出してしまった。よし、ここではもう文学はやらないぞと意志を固め、やぶれかぶれに「映画ゼミ」なるものをでっち上げて翌年から開講。 […] たまりにたまった行き場のない不穏なエネルギーが突如地殻の薄い一点を見出してそこに殺到したかのような気配を、連中は放っていた。この大学にこんな物好きが巢食っていたのかと嘆息するほかない彼ら、それぞれすでに映画について一言を有し（ている気でおり）、頼んでもいないのにヒッチコックのカメラワークについて何十枚も文章を書いたり、あるいは余りある時間のことごと

くを自主映画製作に注ぎ込んでシネアストとしての矜持を示す彼らとは、その後延々とつき合わせてもらうはめになった […]。 (同前、142-143 頁)

この文章が発表された二〇〇三年には、野崎先生はすでに東大に移っておられた。この頃、一橋時代にかんして心残りだったことが一つあると、直接お聞きしたのを覚えている。ゼミ生の多くが就職の道を選ばなかったことだ。私も他人のことは言えない。私の代は、初期メンバーの頃ほど濃くはなかっただろうが、とはいえ、あのサンクチュアリで野放しに映画三昧の幸福を満喫したあと、なんとかしてこれと同じことを続けたい、と思う気持ちはよく分かった。しかし、保護区から出てちゃんとやっていけるかどうかはまた別問題である。野崎先生ご自身も、硫黄特集号で、この点に言及しておられる。

やがてゼミ生たちが卒業していくときになって、教師は改めて教え子たちの不遜な行動に頭を抱えさせられるはめになった。ほとんど誰一人として、就職しようとしないのである。せっかく就職のよさでは抜群のこのカレッジの卒業証書を手にしたというのに、就職先を探すふりさえしない。しかも大学院に進学するわけでもない。 […] 有為の人材を陸続と世に送り出しているカレッジのただなかにおいて、わが映画ゼミは、ブーの群れを生産することのみ貢献してしまった。そんな大それた意図は、教師の側には少しもなかったのに。大それていたのはもちろん、学生たち自身の方だった。彼らはみな創造に携わることの喜び（や苦しみ？）によって生きる貴族たちであり、平民教師の意見など求められることは一度だってなかった。 (同前、144-145 頁)

奈賀達人さんも、野崎先生の言うところの「貴族」的な道を歩まれたお一人だった。いただいたアンケート欄の回答には「その後」が書き記されている。

卒業して何年かたったある晩、野崎先生から不意に電話をいただきました。電話の内容自体は、ちゃんと生きているか？ といったような内容で、自分も突然のことであまりうまく話せず、通話時間は短いものだったと思います。ロクに就職もせずに社会に飛び出してしまった不肖の教え子の身をひそかに案じていただいていたことを、心よりありがたく感じますし、あの晩のことを時折、夢のように思い出しては、胸中があたたく解きほぐされていくような心地を覚えました。

自主映画制作を続け、商業映画を監督するようになった I 君の言葉も引用させていただく。

「…」結局、私は大学を中退してしまいましたが、その後に監督した『○○』という映画を劇場公開するに至り、野崎先生にコメントを頂いたり、トークショーをさせて頂いたのが、とても嬉しかったです。ようやく褒めて頂けたと、そう感じました。今後もゼミ生として、先生に新作映画公開の案内を送れるようになんとか頑張っていきたいと思っています。

一橋大学の片隅で同じ場をともした野崎先生と私たちの関係は途切れることなく続いている。どのような道を歩んだにせよ、あの場所を共有できたことが、かけがえのない「幸運」と感じられる点ではみな同様だろう。今回、先輩方の声を集める機会を得、あらためてそのことを確認できた。以下は小林さんの回答からの引用。

師弟関係？ ってそういうものかもしれませんが、個人的にはあの時期にあの場所で野崎さんのゼミと出会えたことは大変に幸せで、幸運だったと思います。ひょうひょうとして知的でクールだけどたまに妙に子供じみていたりして、頼りがいがあるような無いような、実にこう……重みというものは感じられない……ユーモアのあるお人柄に、「こういう大人もいるんだなあ」と感じさせてくれました（その後、「ああいう大人はほとんどいないんだなあ」と思うことになるわけですが）。今考えると野崎さんにとっても（その後の世の中や大学の推移を考えると比較的）一橋の頃はまだ、「前だけを見て坂道を歩いていればいい」若い時代だったんだらうなあ、一橋の映画ゼミというのは、その中で（比較的）自由に楽しくできたんじゃないかなあ、と思っています。きっとそういう時代だったんでしょうし、一橋大学というのが（当時は、今と比べれば）恐ろしく暢気だったのではと思います。

西能さんも「幸運」と表現する。

このような体験を得たことは、当時の自分がただ若かったから、ではないのだろう、と思います。ものすごく幸運なことであつたと、今にして心から思います。あんまり人様に勝手なお願いをするもんじゃないとは思いますが……できましたら野崎先生、ますますお元気で、人々から長老と呼ばれるまで、長生きしてください。

紹介しそびれた言葉は多いが、このあたりで回想を締めくくろう。

それにしても、三〇年が経過したとは。あの場所の貴重さがより一層際立って感じられてならない。

それにしてもこのゼミは、映画になりそうな濃い面々による個性的なエピソードばかりですね、野崎先生。もし、ここから一本の青春群像映画が作られるのだとして、監督は誰がいいと思いますか？ 現役ならば小林さんか I 君か。もしオールタイムで自由を選べるとしたら。ジャン・ルノワールが最高だと思いますが、ジャック・タチはどうでしょう。いや、やっぱりジャン・ヴィゴでしょうか。『新学期操行ゼロ』の前半に出てくる、生徒と視線がほぼ変わらないとぼけた新任教師のキャラクター、どこかあの頃の野崎先生みたいじゃありませんか……？